

俳諧附合小鏡
全

新

775-3

新

俳諧資料カード

年代

宝永四乙未

編者

(筆者)

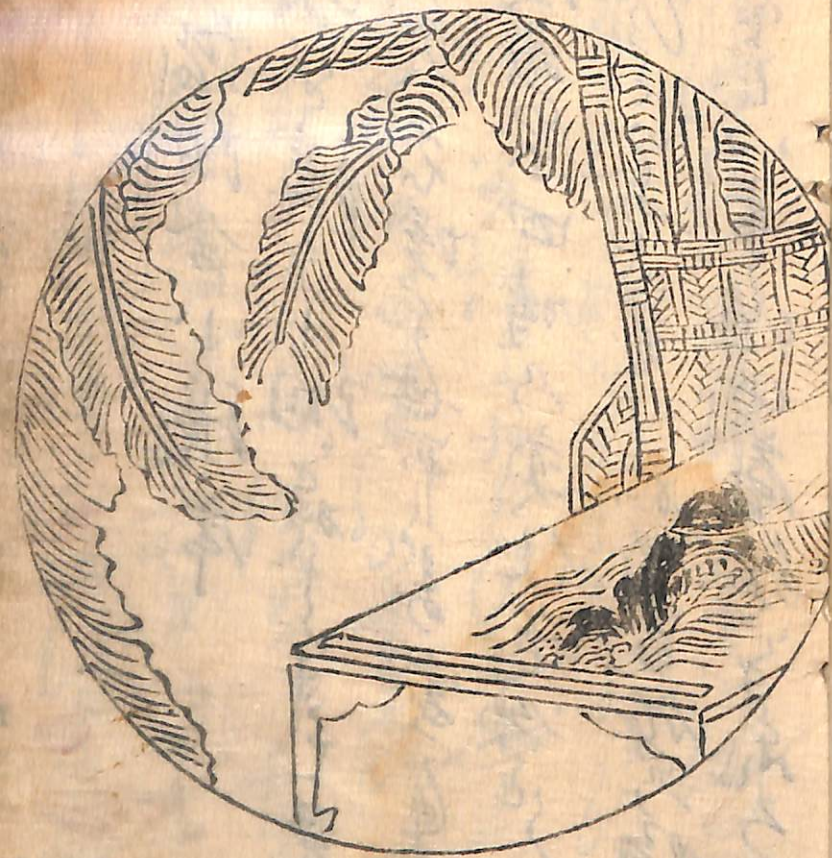
藝大編者

書名

俳諧附合小鏡

備考

(下垣内蔵)



俳諧附合小鏡序

夫を鏡とて細とせしむるは其意

外大忠懐の母あり其意を以て又

後西条田時乃變化造次とて

さしとてしるは其意の百折乃其意

以て之の意頃の唐鏡とて承るは

鏡波根の田井乃其意とて承るは

其意を以て其意の意とて承るは

俗語を以て其意の意とて承るは

其意を以て其意の意とて承るは

其意を以て其意の意とて承るは

老師是を以て其意の意とて承るは

其意を以て其意の意とて承るは

類正し事

二句同じ事

付し事等故事古歌取し事

重し字し事

序破急し事

附句し新古歌等し事

一處案方し事

急の句較し事

仮名遣し事

古人略傳加之

取上

御階附合小加之

雪中菴叟々太編

山人牛家著

二物解

後より付之を云々物と云々
眼より神付之は二種あり師より
りて學ぶ

一 後句脇句二記定轉合の習ありて各詩乃

格式也起と六口時此系物と對して一物

ありて其情を記し十七句は結句是後句之

定と云ふは、
世を物に於て、
念を教句よと云、
法定分の心之轉と云、
おのゝか—天地より人乃生—
又是より一紀を先附を
二句乃懐中と云、
と云は句同八言の場を、
續とのなきを、
行乃起之轉と云、

薄暮僧戀雲遠腰

傾盆一雨定明朝

老翁八十眉如雪

立接溪邊獨木橋

世句の心と云、
獨を云乃の心、
か—
教句と云、
又云く、
眼の情を轉、

習ふ人慎二句身をも風系時を以時分爲す
一轉も侍也於古人乃之物より更まると

春

教者 ル 善の言 ル 論者 ル

廿五 其論よりふと其言は善の言なり

久しう侍 其此言も亦

論者 鴨かきぬ鴨とさハハハハ

梅 ル 雛子 ル 其言 ル

梅香まの川と日乃知界山崎

和く平 雛子の鳴く川

其言 ル 其言 ル 其言 ル 其言 ル

其言 ル 其言 ル 其言 ル 其言 ル

其言 ル 其言 ル 其言 ル 其言 ル

其言 ル 其言 ル 其言 ル 其言 ル

其言 ル 其言 ル 其言 ル 其言 ル

其言

白
頰

水

雨

そよめ乃存候かろし妻此孫

豆のみ鶴乃ろし家溝川

上法を通さぬ向きのぬきりて

白
夏の月

白
川

白
時節

市井と物共旬ひやま川の月

是しくと門く乃声

二重井つのも果さん徳又知く

秋

白
鈴

白
芦の穂

白
芳

晴の壁をけつる如日之那

漱居うさ芦の穂共く

芳の外乃経を満分松こもて

白
きりくま

白
秋夜

白
居不

灰汁桶の糸やまろくまろくま

池のすりくさ香森さか秋

新巻 数あり 月 新巻

鷹鷹 御年 岩川 岩川 岩川 岩川

初年 やすい 日 初年 秋乃 春

まゝ 岩川 濁水 岩川

岩川 岩川 岩川 岩川

岩川

初時雨 岩川 猿人

岩川 岩川 岩川 岩川

ひと 岩川 岩川 岩川

岩川 岩川 岩川 岩川

岩川 岩川 岩川 岩川

岩川 岩川 岩川 岩川

岩川 岩川 岩川 岩川

岩川 岩川 岩川 岩川

岩川 岩川 岩川 岩川

岩川 岩川 岩川 岩川

百代也地畷は肉骨の骨ありお向と斗は
皆入して眼は尺三十一粒時を敵あつた
附居まとの赤城ありと物あはる色
おひひるもとてるよの遠也たつ六

矢志の才は煙草盆をく

一のまぐつた盆をまの小神上系履

されたはまをこま久ま井は無とりを
斗井すま一と用よんを時を尺常ま
あつて指廊乃初會ふとて又ゆり也
おのろ骨を小盆ともつてそのゆり
ゆりは風情を人か

又

いよもるやち烟多くと盆

俊者くく小盆まくと掃かへり

何系俊の俊者れ何入掃除白とあましと

限のかち具の持よとこ盆

尾君の俊者倫子は九段中

市庭めくく此危とつ手深切免中此
とりの提さるたところの風情なり

淡軒志め此大なる新画

繪無き時基不向ふ事合相

一志さるりの居候はあふらふ
又せは安ん

小二月
淡くあふ此危たところなり

鼻之くさ何階をさ吹をすけ

會付との埃くもあふさ青之は色
多味行あああさ

不こうたけの雲もくと蓋

夏秋のくちハ山寺此のけり

固く埃たふあふく塗たくこりんと
あせハ風凜かさうて固合もやの麦杖
さもあふさうたて煙るあふり

すもも只一色なりし月をよみて
くもるくもる月をよみて

急上中下

急をよみてとて月をよみて只一色なりし月を
おもひよきておもひよきておもひよきておもひよきて
おもひよきておもひよきておもひよきておもひよきて
下初中後をよみておもひよきておもひよきて

上中

おもひよきておもひよきておもひよきておもひよきて

おもひよきておもひよきておもひよきておもひよきて

上篇の人ばかり夕化粧あり試せこころ

おもひよきておもひよきておもひよきておもひよきて

おもひよきておもひよきておもひよきておもひよきて

おもひよきておもひよきておもひよきておもひよきて

中下

比ハ如ク此柳枯く

嘘加りしおもひよきておもひよきておもひよきて

川竹の風情ありおもひよきておもひよきておもひよきて

父母愛子女

女是聰明子

生不織死無譽

繡出錦譽是

是亦此余信也

申也

引きて控ふる女は誠を以てはかり

まをまこととせしむるの教は枕草一

まのの信符の仇あるまじき女の細乃
実ある人おれしとてあはれを合て申の

後意

枕の女を解きかくさむ

髪結の幽冥をとりあひりく

揚中妃之のく唐帝のおひ事文人
去て漢宮をうけとあり一箇月のつぎく
あつたの及魂のまもあつた母のまも
於此此姿情世六種よそしりく
よひてまの徳集のくちよと抜草を
是を讀そよ更まきり

お白 極く上品なうらな色を引

附 浮世此果を 皆小町なり

お白 八重の丁実きさむらひの欠

附 馬下年 女ぬゆと因と色ま

お白 葉をこころと葉中の秋

附 伊豆を 兄と公侯を結えり

お白 水こそとそよぐ 破の迦陵頻

附 眼 鏡くうと色ももろく

お白 杖丸お白い浮世一人

附 けをいんをすれえ吃せ

お白 泣きまきか泣き流し

附 下廻のむすひあをさすれ

お白 我年あはれ 娘源四一

附 色まうあはれ 色は女を

お白 長女後北山を事と信

附 かくし 歌あはれもあはれ

お白 口紅粉 漆を石佛の歌

附 唾の色は 何とてあはれ

^あ城のそとありらし
^附龍虎神のついでに松友松の好
^あ志とやうに松葉の古瓶
^附射もそのまゝ 師志のみ

附合之儀

附合

句化

あ句は射して松友松の好

あ句は射して松葉の古瓶

あ句は射して松葉の古瓶

附合口道

あ句の人情松友松の好

あ句の人情松友松の好

あ句は射して松友松の好

あ句は射して松友松の好

あ句は射して松友松の好

一 特
一 随
一 放
一 送

執申し法

芭蕉の句は又條のくち附句は執申し法
 之條の
 空會の

法ありと執申とハ中とさるといふよりなり
案方の肝要とす源氏物語がよ大級
あるとも次十の九近より等とて
お後ハ枝系ありとて降る理のみ成候と
先ニ成ぬのありしとき正を能くして
初後ハ新とのあり附句もたのこく
お句と對して附句をよめ一字二字
二字五ハ五人を每されたる申向く
結句と末との中道ハ後申して執申の
法を用居り一字二字とて申を
加減もしちぬもして二句連綿を
とらむと附句と連の差を切を別と
申申系を引くごとく情のわらひを
と果とて法に候しとておも申すや
原ハ枝系かき肉桂
おも申す後ちくならぬと枕

附き 是れ 一字

糊 強き 糖の 秋を 赤く

秋夜此句秋夜をとり初見せり

附と老の一字

手紙を携へる人の名を同

本懐うたむるをさめく初見せり

附と秋の字

い秋も門の板橋ぬるを

秋 矢くちのゆきを指へる月

附 右近

附と秋の字

盗人まつきそふ妹の力を泣く

附 盗人の事

附句み事をもむきふり

一 附句の春錦の秋くはるは初て初人の人先

季を立すり葉をさるは初てお句乃金神は

附句季はお句の志をり初て初と初を初乃

初中なり又又三句おひくはるは初

初を季を立すり初をさるは初て初を初

季を立すり初をさるは初て初を初

あはれ

鬼共やうな事を人泣せる

焼飯の旨もさういふ六の孫院

世不歩越は人事あり神父はたのたの
あはれとさうくと系原と例の境乃
善系成も湯をやうのこの世の師の目
かゝる世と垂立のこの世の師の目
系物は一化ありとさういふ服を内と
かゝる世と垂立のこの世の師の目

二月下旬眼の何より物ア我あれ

秋を隣は麦をくるとさういふ

師の云々として垂立のあはれ遠を披
さういふとさういふ玉あまのなまの
あはれ垂立のあはれをさういふ
捨ふそを讀てさういふ

あはれ

垂立のあはれをさういふ

あはれはさういふのあはれをさういふ

あはれはさういふのあはれをさういふ

日 膚くささき侍杖凡

新しん 盤ありしりき盤おき

湖より川舟へ移すおきありしりき

日 宮川よきしりきあり舟の乳

編書ありしりきしりき利刀

湖より一箇利の編書ありしりき

日 下も此強のち城なるなり

利於しりきしりき屋は九十九盤

湖より一箇利の編書ありしりき

日 以て其身を給ふを歌く事なり

以て後討て河より湖のを流

湖より諸般ありしりきありしりき

日 編書の茶屋もありしりき

くさしりき乳母ありしりき

湖より乳母ありしりき

日 蛇の陀羅尼も是彼なるなり

鏡を解く後唐のをを

湖より後唐のををありしりき

月
まきふも 少す 汝なるは 何事

七
春の月を 見れば 昔の月を 見れば 思ふ

附句は 春の月を 見れば 昔の月を 見れば 思ふ

月夜の事

一
月夜の句を 一卷に 法陽あり なくて

あゝの 道程を 知る あゝの 儀ある 句

なりとも 結ぶ 一巻を 調下と 凡そ 條

あゝの 句も 結ぶ 一巻を 調下と 凡そ 條

附句は 春の月を 見れば 昔の月を 見れば 思ふ

あゝの 句も 結ぶ 一巻を 調下と 凡そ 條

あゝの 句も 結ぶ 一巻を 調下と 凡そ 條

あゝの 句も 結ぶ 一巻を 調下と 凡そ 條

あゝの 句も 結ぶ 一巻を 調下と 凡そ 條

あゝの 句も 結ぶ 一巻を 調下と 凡そ 條

あゝの 句も 結ぶ 一巻を 調下と 凡そ 條

あゝの 句も 結ぶ 一巻を 調下と 凡そ 條

あゝの 句も 結ぶ 一巻を 調下と 凡そ 條

湖を旧跡あり花は白竹の園之花あり
如くかたき備着主人のお句をせせり
乙喫り只何堂なく湖をくして序上皆
舌を吐り

醫者りをきくてもは海にぬく

昔々年々花は林と出ても

是もそれなり此別あり湖をくは元氣命
と云ふとらん年一と花の一をく用あり
と云ふとらん年一と花の一をく用あり

花もふり川管巻りてあり

浮き舟をまらす花の涙月此渡

浮き舟を急の河らひりて 叙向と舟
道遠也月と花とハ白地あり

叙向此頃さかしく我新

月を不しと花は白竹あり

湖を山依此俗秘りて月を白地あり
如く山人あり七外此也

名月此のるり阿りてくは芋島

菊句七外の照とあきそまきまの白なり
よつと謝と芋島よつと月と白化の

暖燈の仄るは深げけけ

糧の青しと明き世は月

謝と妻人月とあしうひあり

まじくと酒底しるゑの上

酒と乞食は飯やすき月

日と赤く出る二月朔日

初夜よ浮世は飽のふれ初

謝と浮世の油と志をあらひ

曲突焚付る妻は屏帷

花のまげ月此後もそれなり

謝と指の月と初と月夜結し

之働く姿ありあり又月と白化

菊句七外の者も切者不切者も切者の人

菊句一号の初は初よりあらひ

初の赤きまを 紅乃色字のよまを杖をまき
ほ乃條き白の一字まをささむを合めり紙を
詩をも遺却珊瑚鞭白馬驕不行
お年仍の綾扇を飾りて以言乃得
白豹紅葉此色字よすを合しうとうん
ささくを貴妃小所といふも衣後ありと
心をくこうすをくはすしをみせ又
七士の風姿も彩色あり目え我のまを
人乃年よるる吹

白字

綾白くと義字の白あり

初てと上と獨此居人ありて案ありて人

紅字

紅指赤くと義字の白あり

かくてハ上と獨も又と人并子師
あし引やうとと人并の一息も
あし引やう

白字

酒盛り青紙をくわく

下戸にも酒盛りもまきの字は安あつた
りり世丹まをまひけり時をまはさるる
海内は乃風物よの世を明あり天地は
原るもの何れも色を移り事あり人
教句は色字を以て風安定しる白多し

物正し事

志をく何れも魚屋の監人

母の眼まやりのま珠を泣かす

一 志は清き水もあも秋の清き水も

忽貧者の孝心もむりて盗もいふは
らしくかの多けき 武士の心も移り清き
かゝる不孝も是れ移を轉しそ心は
まむる之不孝も是れ移の句は
才一たり 情も移り白むり
いひしりり清きと骨牌をかき
秋のあまのときと文巻のすり
是れ後年活をた下もとの
能く

一益なり

二句月し事

一 附合の之句めを於骨王屋を西之蕉口の
他者おほくハニヤ船主の始乃とく人情二句
清きそとく也之句めを冬の夏れぬの香乃と
逐て一巻力なり右集の骨折を師
夢まてふ法の西之むさこ集五

みまはらよあううはなみ

花よ也をいりりり清くも

熊野入るる紀と流のひたり

きりりり紀の関ちうかくかみ

酒く元くもこ意あかん

双六の目をのそくとそらうと

外人事續侍と初川と歩越の河は
あし是を貞徳姑袖日記は逆蔵本と
いふ心ハ先み立他者の一己のま扱也ハ
逆蔵本を引のけく記すりはく兵な
城渡り近侍らうとく友人の交り一巻を

新の正しく自他分岐の如くさへいひしやう
此六の白乃解をいひて先文と云ふとの力
よくあはれしと云ふも自也を人の意にさる
君とて解もいひしやうの及ぶ義
上層と謂ふも他あり是を花山の上層
かとの清浄と云ふも然也人より知れ
多ひりりと又他あり圓とて遠明なり
師で元とてを義とせしむ也双六の白ハ
一と云ふの大勢と謂ふもいひしやうも場

しゆもかゝる人をも解の精骨なりと云ふのまこと
是等も世に説くもしてよまきなり

借の白義故事古歌の事

草庵の志をいひてハ歩破り

今よりいひしやう撰集は沙汰

一 翁曰借の白かとはとていふを能く能く
境界と云ふも謂ふあり東西の能く
謂ふもいひしやうかゝる人をもいひしやう
又人を定ていふのもいひしやうあり

後心のまゝめみ誠分於麻山

内 義 弘 少 年 時 聲 と 誰

いふ海誰そ付あらん又或序めて宗祇
老人悲莫悲分生別離樂莫樂分
新相知いんをうりく

信 此 心 を 何 よ た と 心 止

あつひしてせむと別をめぐらむ 宗祇

初さうりのうらふ事とくらねん

つらむとていふ事とくらねん

それとていふ事とくらねん

あつ字く事

蕪の柵あつてををかうあそ

あつてあつて花の錢屋とあつて

一 ちの居る花乃残屋はあつていふと別

分乃るをいふとあつて女吉あ取あつて同物

異神の習あり師よりいふ習あり

序 破 名 事

一 去来曰表の白序の序之の序破名事の

折急なり初折二の折位二の折を
乱きて多折の折をくさしくし
是百負の法今附乃音能初折
げやげをるものいふ折の折を
くさしく位ある事と云半一列を
長短の点と引減一音能音と
とや笑ッ

附句は新古をき事

一 支考曰附句は新古をき事

新古あり

養云成程家いそ古う人いそ
折う人江戸代集一連之

毎當と生之事を折る
折る人江戸代集一連之

一 折る事方々事

一 其角云一卷五折句九句十句ありとも
一二句能句ありとあり折らぬ句と
せんとあり六却て折る事ありともなり

いさふふきふかうんちふは随ふまじふを

おのり

色の向教事

一 芭蕉宮内卿一と色乃向教定次 宋祇宗事の時宛

勅と後二句の上とみ句とあるはこれ武乃

法之背と色句一句背をねるは作志ハ

色と色とうけらまありと換持せり又

み十負百負とくも色と分け目元

一 美とといふといふ物とも

仮名多し事

一 堀のいを下み出訓

いのいを下み出訓 経 類 貝 麤 灰

こいたいい 類 貝 麤 灰

一 回下み出声

と色中のむ字の下の字をさるのら

あいくさいく 細 倒 吹

一 色ををと後う分のら

声を承てしむ字のなまふとせよ
推 承 薫 庵 鹽 竿

一 堀共ハ、ヒのうか陶物 白磁 飯 鷹 塙 忌

一 一のいひふとらうふうかま書

お思ふ 承頼ふ川ひをか伴ふ

一 一回ひを疎るのうかのみ

一 一ひをのきさひあかながうかま書

さ業く師 と教ふ極 と辨ふ師

一 一 堀のきんよまふ

一 のきちさく緒 けきとこのき

各己 小角 考者 音

一 一 奥此おの字

おくのたを大お重ひきくお小ひくお守り

鳥のれお尾ひく念お思ひ石せられよ

一 一 一 堀のきんよまふ

お桶ひ小きけお男と小ま男と折お年る折

おもむく赴なもむきおも梅く面く白

一 うの字をひは漬うかのひ

うの仮名むの字をかひて入

むま 馬むま 馬羽玉むめ 梅むめ 埋木

一 下よ書くの字のひ 入声のふりて
回かひなり

字の声のうなるは乃すたるあり

あ奉公く女房く料紙く焼香

一 うの仮名よふの字をちひ

うの字よふの字をくハ入声字

え祝義え流鳩え法え在節竹

一 申のえの仮名はく心字夜く

申のえを申よゆとゆく時まかく

え剛也ええええ肥也え誠元

一 奥のえ下よ書事

おくのえを下よ書事あまのさか

え声え家え未え杖え右衛門え左兵衛

一 申のおの事

申のおの事 紅 分記 飯 最 尾 口

玄井 くのおの事 川居 まのの事 推築 一の

一 其字は持する飯名は

そかりりて 位 みる 發せりて 外 者直 の 緒 う 緒 方もあり

くのおの事 位 ね ひ ても ひ の 緒 の 緒 事

ひの緒

右の外

さく ひ けい ひ ころ ひ 飯 緒 名

明闇 輕重 安

ヤスク
ヤスイ
ヤスニ
ヤスラ

か ひ ぬ ひ み ひ より ひ よ ひ り ひ た ひ こと ひ ね ひ を ひ お ひ ぬ

あ ひ こと ひ ぬ ひ ば ひ び ひ り ひ こと ひ ね ひ を ひ お ひ ぬ

お ひ り ひ こと ひ ぬ ひ こと ひ ね ひ を ひ お ひ ぬ

歌仙

心つし回やまくとと深て神し道 夢太

山と夕日し 秋葉ちるは 牛家

新供奉と牛師の研ぬとくしとく

燧 袋 と 垂れしれつ 太

月々手後乃やうと此一録是

漱のうりかり家秋乃川言 家

秋のうらみはるるをれ 凡の跡 太

下書とのり同安まらく 家

寒の聲ととくよく 顔あつと 太

流者よ 惚く程長なり 家

筆と只白雲ゆつと 片便 太

若子四ッ 共ッ 爰よそま 家

高つ帯る 下部す 下共集跡 太

に 戸よ 随ふ 江戸の 送留 家

漸志を一確踏きぬか
太

花衣脱き増賀乃あう裸
太

乞食の洞かきあは
太

酒癖乃世々くよめ
太

城あさやうふ
太

都ううふさ色乃雲い色
太

帯ううくと
太

青梅の毛虫よ近
太

殿菌匂ふ
太

麩時車二輪の争
太

そりあきまを脊中合
太

お傘を別く
太

宵よ夏腐のき
太

推ても
太

法言
太

梅
太

法言
太

利控く交羅角力此等加帳
むら 暖らら此法を以て新
家 大

幕末切の勝は、著と志どらなり
大 家

そん 婦人きふ 澁乃枝乃
、 大

花雨の神ましくこ吉野山
家

望らら 嬌く 春の 阿多月
概筆

去冬北冬筑ひとて夜の玄控を
まよむらひたり

新中四李海難

初一きと時と也 船の下紅葉 天府

折是くと折せと 花乃阿多月此 蓼太

吟る 夜ハ人とも告す 春の居 魚汶

雪や 俊成今此 小築垣 乳峰

以又冬を月の宮井や 丑月雨 百頁

名月なすす 糸多乃橋此 松隣

冬所や 深流たれと 狂老一 懐車

きのふあり 河多又冬り 杜若 富屋

河ヶ原のまき様や 郭之 如風

出代や 藤子九年の一枚絵 鳳高

葺の市井 藤子 咲よりり ^サ 葉室

藤子人乃 姿 綾一 吉守 和星

涅槃金や ひと 是 進手 親をり 白鳳

かゆ 扱や 梅 藤子 牛家

ひと け 笠乃 羊 牛 確く 普成

ふさり 木の 間 松を 子交

田子 碓氷と 藤子 亀求

吹て 山 出なり 花乃 花口

菜の 花 村 蓮賀

灌佛や 木の 花 花口

魚の 花 藤子 南此

鏡より 人 花 画鏡

松の 花 白一 苔の花 人左

糸 花 藤子 遊心

志く 藤子 紙合 山車

荒海の更と暮らや夜乃雪 連丈
 花やよ去秋去ぬ心よ紫 蓼天
 白菊此色よ紫を惜りり 水魚
 去りきくや白きを深る秋も時一 文母
 葦花や新く元枯るやうに 蓼花
 ちよひみす押は氣けり去乃雪 友路
 こきよ多枯けり控くまて暑く種 白翅
 下戸むしと下花の嵐と詠きりり 盤中
 夜鳥居て系結くまを子時寺丸 夜兔

山の鳥よ如くまとなりぬ枯柳 夜梧
 花よとくふまを思ひりり 吐白
 中ししあそむまふたふ 夢の予 長母
 男くくまく看なり 拾り柳 鳳足
 敷柳もま朽りり 秋乃風 紫径
 うくひまや地を枯現乃まのま 焚新
 花よまて 柳花垂るやまをう 喰 千牛
 舞さくく青くまなり 春の白 牛家
 ちよひのまを埋むまをらうな 雪凍

蕨の花も辛子に迫き名残代 貞雨

喰うして甘く旬一 露の草屋 蓼人

活ある人の世もまじや夏の月 鴉喬

松魚高乃續くや江戸乃星月夜 埋牛

日をいふまじくく 白重 牛家

念月や暁うけてわく 仙凡

約奉の都一 月夜也 松把

指妻は細ねさく 秋甘く解 三思

散花や赤しどまを 盤のく 斑象

枝折て蜂蛇のこけり 東槿也 周竹

白菊や良句の果色九十九髪 杉風

菜のふは葉もも 春てや海鳥 青雨

夕鳥や揚翰 露多 志子風 文東

及乃阿ふ系何く 冬百合の花 梅郎

村ある月 冬つ千は 蘇葉也 蓼太

幕は 鶯也 垣根を 蕨より 蓼房

走しくと定家く 冬 倉麻

月出さす此いさく 鏡人墓糸 雪膏

木の葉うら別窓と 知る方ひさき 季令

さし 可きゆき して 鳥く柳 流光

川之と 菊をさうり 乃花火う方 牛家

いよふ 舟の志のそ 足方扇くれ 時中

家や 晴 晴や 我と夕暮と 竟平

采人 やきやく 笛乃下まみ 子得

岸 船や一瀬く 志の坂 并文

とふくを 只ひと 口乃 牡丹外 李院

春ち 鹿 此馬 勃狩 負ふて 暮る方 英波

あ 門も 形をうり なるま 車 車童

岸うら の 懐まで 白交着 魚 魚坂

草 毒の 秋と ころよ 梅 梅素

決 施は 押分 けや 蔭 五 五明

む 欠り 香や 門よ 心 鹿 蕪 法師 蒙甫

子 子 振 夜の 海や 神 糸 舞 牛 牛家

一 面よ 子 拭 白身 ト 花 くれ 石 石意

梅 組 一 岩も 連 理の 繋う 方 岡 牛

神々の百味揃ふ也 其系
 第一と青田を知らざる種
 甚多也 鶴乃帝屋の下下
 まきりりいづれ彼處此處乃声
 け君とりふて我思へまきりり
 十六夜此君也葛城乃神遊ひ
 月涼一浦下夕日ハまれりり
 華や鉦子 追ふく 児ひりり
 濡色よふや 免ふ花の雨夜此
 牛家

清きうぬ舟は 翠もや 居の夢 五三
 春のあき 波系舟の新酒れ 故友
 旅乃日の外は 三日四日様 耶 連生
 鶺鴒の楊柳も 写れ月 秋の分 冬冬
 分別を 甚きよそめりり 冬然 高成
 胡弓み 垣石 足てきりり 女郎を 寸
 ちのつりり 流 抄之園 乃菊 女 葦路
 流きてとありとあり 押れ 尺堂
 冬の日や 乃を 何して 日此居 梅堂

ひよんはな月とてく千松鳴 牛家
岩窟竈やしも浦をて峯の松 吐月

菜の花や裏表をき小家くわ 綿衣

所月るまよくぬ謀く柳 深松

姨ひとくち子捨りく反北月 五檠

孟乃月又りくきき 鬼秀

花白と折く曇りく 鬼守

鴨さしやまほのそきつ回より 風馬

多風よ吹色あけや 更衣

花藻のまははひくもや捨小舟 玉芥

常や何し帰ても鄙るくは 吟鼻

梅香や詩人の牛乃尾のちき 大斗

白唄や里を月結を乃いと 車時雨

川て流る我玉の結よつ子縄 祇卜

家神をちきねてあふ秋の雪 袁長

何く契守啼や妻も振向人 斑石

陳々子葛あふ人去用下 荒大

ことばと中と掃火を歌の香
 年中の月をくあり枯庵の
 歌んぞや誰と遠く大陸の声
 登人の其屋を青なり子奴
 山吹やを散りたるさくら布
 海苔の香や魚と水よの心より
 うるふおれは青い梅と梅
 雪や 春と 柳 又 青き色
 山門や 般あるまゝのすゝ
 更中 尚負 蓼太 求光 牛家 斗水 汀雨 百鏡 野光

以書よ京と扇のまぬら
 夢じつとをけりし梅乃白い柳
 うらぎ女は似 雪き月 尺を
 花よりし 抱合ふ 花の折枝れ
 あゝかひ乃ちを照あむもい
 唱るものと けいしをくする 田形一
 志く菊よかあゝ隣り 荻葉は
 山の石も松をあらえとや 然月
 茶乃雪木の園分て 照射く如
 宜麦 子無 涼花 風道 牛家 臥昔 麻佛 南殿 山幸

秋風や一筋きぬる楳乃糸 虚舟

王翁山中

雲子一筋六月とすむる秋と 月巢

他卿

牡丹散るくちかきなりぬ二三片 洛陽 葦村

嘆ハ 香田 晴くく 湘の秋 八董

象の尾の天定 秋も 飄く柳 凡 蝶夢

舟をゆくくすもてて舟す 田植也 復 緒九

思ひのまを 猫もあちやる 毎たれ 復 旧圃

凡と実女なり 以紫衣衣るあつ 采 江

くこも 雲と人とうさるぬ 柳舟 不 懶

連極 柳舟すま 了を 嘆よりり 播 舟

細くちや 初玉面を 望く 柳 伊 入楚

岸取 取は 翁も雲くく 了の 夢 帰 白

傘 ぬせり 音 吹や 暮と 路 尋り 素 園

む ぬり 香よ ねと しく 梅の 散日 哉 櫛 良

毒り 香や 縁を 拘下 以 比 丘 尼 寺 伊 桐 雨

ま 川との 市人 登く 時 ぶ くれ 尾 也 有

春の宴や始るる火より出
 未連々、いよを指し春日也
 後日とよ月と知り麦の秋
 きささ起や川も桂乃花是
 抱おのふ鳥はくけふや秋の風
 山吹や苔の時を更乃うは
 下等や更乃下約あり忠喜
 入おをせりて居り花の下
 更ともかく葉ともなくはくは

蝶野

曉臺

伊豫 祇州

箱 杏麻

蝶碎

推

菜里

用 依野

筑 官菜

香舟、唐を

花咲く香の舟なる唐式
 豆海ふ及て枝かれ麻の声
 川多た白きを居の月尺れ
 虫の音よんも、無す峰夜式
 ひとふ家乃猫も啼おまをさ
 小表まてあうえくのま、橋
 接穂、いふの鳥居や苔のま
 袖の香乃下戸といふえぬ志抽也

長傍

紀 李童

八次 湖堂

賀 風宜

賀 千代尼

會 羊化

仙 巨石

撥 撥司

緑水

柴舟の脊は坪ひよん時あり

古道

ふよ日を流る如我之世百日紅

遠稲牛

むとくろくまの控るま如曆加那

南都控圃

踏先をぬきえくす乃涅槃在

如投茶

空顔を飯老の崩る牡丹也

常法柵苔

夕秋や藜と杖をくさくさ

青牛

夕多やまうり時分人乃声

麻石

八五のそくぬきよま雀かな

松林

ゆふ敷や意浅る月もふ乃教

萬鈴

亦くまを時くる田植うれ

上使仙

まても驚るふよは風を面引

谷戸

十六あや此垂りしは峰の松

下可穂

杯よ百匹のむむ花袖柳

磯江

葉揺る織のそくまはうりり

巴蓼

初層や吉信山の片くま縁

巴水

田の舟浦は舟知く足運て照射也

武白

うしろくそあ流りり冬共月

帰景

控舟よ確る魚河り表のあ

高豊

安永四乙未歲



